

大阪府立中之島図書館蔵『狂言世利不』について

関屋 俊彦

はじめに

大阪府立中之島図書館に所蔵されている狂言台本『狂言世利不』について紹介したい。

中之島図書館の大阪資料・古典籍課総括主査の梶原修氏から御指名があり、平成二十七（二〇一五）年三月二十六日に同図書館で「狂言の楽しみ！観客・研究者・演者 三つの視点から」と題を頂戴して講演を行なったことがある。

その際、梶原氏が同図書館に所蔵されている『狂言世利不』写本八冊を展示され、どのようなものかとお尋ねがあった。学会では未紹介のものであることはすぐわかったが、即答は難しかったので、後日、改めて調べてみて、これが狂言和泉流の台本で新資料であることが判明した。たとえば現時点で狂言台本について詳しいのは、橋本朝生「狂言台本・曲目所在一覽」〔『中世史劇としての狂言』一九九七年五月・若草書房〕であるが、記されては

いない。拙稿にもまだ不備な点はあるが、長らく研究者の間で忘れられていた狂言台本について、以下に報告し、研究者に周知されんことを願う次第である。

今更いうまでもないことながら、中之島図書館は歴史的由緒があり、特に郷土資料室の書籍類は全国から研究者が調査に訪れるという大阪にはかけがえない宝庫である。私にとっても若いころの思い出が詰まっており、拙著『続狂言史の基礎的研究』（二〇一五年・関西大学出版部）の巻頭随想「近松門左衛門」にも書いた通りである。こうして、報告できることを喜びとするものである。

一 書誌

以下に書誌的なことどもを記す。

冊数：八冊

表紙：黄土色・覆表紙

寸法：25×160mm

題簽：貼題簽・地桃色・66×90mm・曲名列拳

綴方：袋仮綴・綴穴四穴

紙質：楮紙

印：朱丸印「大阪府立図書館 大正九年二月九日 59580」

*大正九年＝一九二〇年

本文：ほぼ九行書・小謡部分に朱書きで見せ消ちあり。役柄朱書。

一筆でなし。

寸法統一のための裁断跡あり。

特記：第八冊《酔はじかみ》裏表紙に「鳥居氏所持」、《鞍馬参詣》

に「卜里居」と記す。

同一人の筆写ではなく何人かの手が入っていると思われる。

以下、曲名は内題でとる。外題が異なる場合は（ ）に記した。

〔第一冊〕

墨付29丁・遊紙（後）4丁・細字。

〔鳴子・若菜・石神・太刀奪〕

〔第二冊〕

墨付33丁・太字・内題は曲名並記別丁とする。

〔文山賊・因幡堂・昆布売・鞆さる・通円・蟹山伏〕

〔第三冊〕

墨付33丁・細字。内題は曲名並記別丁とする。

〔保盛種・伊文字・神なり・楽阿弥・縄絢（縄ない）・貫髯〕

〔第四冊〕

墨付30丁。遊紙前1丁・後3丁。細字。

〔武悪・祐善・素袍落・墨塗〕

〔第五冊〕

墨付30丁。遊紙前1丁・後3丁。細字・内題は曲名並記別丁とする。

〔法師母・犬山伏・瓢の神・引く、り・哥争〕

〔第六冊〕

題簽あるも曲名表記なし。墨付17丁。遊紙前1丁・後14丁。細字。

〔隋方角・章魚・昆布柿・末広狩〕*《昆布柿》《末広狩》は冒頭の

の一部のみ。

〔第七冊〕

墨付32丁。遊紙後1丁。内題は曲名並記別丁とする。

〔伯母酒・不見不聞・千鳥・樋の酒〕

〔第八冊〕

墨付37丁。内題は曲名並記別丁とする。

〔酔はじかみ・鞍馬参詣（内題は不記）・塗附・佐渡狐・腰折〕

二 本文検討

『狂言世利不』は、随所に和泉流である特色を残している。以下、『能楽大事典』（筑摩書房）を参照して、まず《文山賊》の曲名表記は和泉流のものである。

次に演出面では、『石神』は、大酒が元で妻が家出する話であるが、和泉流では中入することもあるとあるが、まさに「中入」する。

次に、台詞部分を取り上げても和泉流で特色のある台詞は、『太刀奪』で「弓なりとも太刀なりとも」・『因幡堂』「まうし妻」・『昆布売』「北野のお手水に行く」・『靉猿』「隠れもない射手」・『通門』「平等院」・『蟹山伏』「三つの峰入」・『伊文字』「申妻」・『神鳴』「鎌倉に住居致す薬師」・『楽阿弥』「トウラウラウリリトフラウラウリロ フウ」(ゴマブシは大変詳しいので、これも和泉流の特色と思える)・『縄綱』「お前のお内儀でござる」・『貫錚』「童は此屋の」・『武悪』「殊の外 気を詰めた けふは東辺へ遊山に出うとおもふ」(*ちなみに驚流にはない曲である)・『祐善』「我洛にて有し時 傘をはり」*フシ記号は墨だが詳細・『素袍落』「今日のこと」・『墨塗』「勝手次第に国元へ立」。

更にいえば、『石神』『若菜』は、大蔵流では明治初年に通行曲となったものである。

以上からして、本文上からも中之島図書館所蔵の台本は少なくとも和泉流の台本である。

次に、紙面の都合上、一曲に絞って考察を加えてみたい。稲田秀雄氏に「狂言「神鳴」の構想」(『藝能史研究』第一四二号・一九九八年七月二〇日・藝能史研究会)の好論文がある。

諸本を比較された上で、説話に原型を探ろうとされたものである。

今、ここでは諸本の比較にかかわるところで和泉流を中心として借り用いてみる。

一、本来「瘦薬師」であったであろう。(次第)は北川忠彦ほか注『天理本狂言六義』(平成七年五月・三弥井書房)では「抜書」部分にあたり、「薬種も持たぬ藪薬師」と謡って出るところであるが、『狂言世利不』は残念ながら通常の出で、(次第)は記されていない。

一、雷は落ちて中風が起る。『狂言世利不』の雷も「此中、久しう中風か起て、引こふて居たれ」と中風持ちであったことを自ら白状している。

一、雷から礼(葉代)のことを言い出すのは「天理本」「古典文庫本」であるが、医師の方から葉代を請求するのは「狂言集成本」「新編狂言正本」である。『狂言世利不』は医師の方から請求している。

なお、稲田氏のいうよう、現在、大蔵流では『神鳴』、和泉流では『雷』と表記するが、『能楽大事典』で指摘するように和泉流でも古くは両様に書いている。『狂言世利不』では『神鳴』である。いずれにしても『狂言世利不』は、本文からでも和泉流であるといえるが、どの家かというといまだ確定し難い。

三 「鳥居」は豊橋魚町の者らし

狂言方と和泉流には、山脇和泉家・三宅藤九郎家・野村又三郎家・

野村万蔵家・宗家の弟子家であった狂言共同社がある。私の考察では、宗家と呼ばれていた山脇和泉家は、もともとは御所御用すなわち京都を中心として活躍していた。実際には有力諸大名の庇護があり、野村万蔵家と三宅藤九郎家は加賀藩、野村又三郎家と山脇和泉家は尾張藩の時期があった。

特記したように第八冊《酔はじかみ》に「鳥居氏所持」とある。また、中之島図書館が大阪府立図書館名で納入したのが大正九（一九二〇）年二月九日のことであるので、いずれにしても近代初頭の時期に絞り込める。これらが台本の性格を推測できるものとなる。

和泉流で鳥居姓の者の有力候補に愛知県豊橋市魚町の鳥居家がある。『豊橋市史』第三卷（昭和五十八（一九八三）年三月三十一日）「能楽・狂言」をしばらく引用する。「幕末には衰勢であった当地方の能・狂言も明治に入って世が落ち着くと、再び活発となった。殊に明治七年旧藩主大河内家の能・狂言の面と装束を魚町の小久保彦十郎が、同町の尾崎安之助と佐藤善六の援助を得て譲り受けて以来、魚町商人と旧藩主を中心に能・狂言熱が高まった。この能・狂言の面と装束は、一九年小久保彦十郎が弘前へ移住のために抵当に入れたのを、滝崎安之助と佐藤善六が首唱して講を組織し、魚町有志によって買い戻し、安海熊野社に保存されるようになったのである。明治期における能・狂言の記録としては、魚町加納屋（鳥居氏）の書き留めた『能狂言番組』一冊（魚町蔵）

が最も古く、九年から一九年に至る計五七回が記録されている」。また、第二巻の嘉永三（一八五〇）年のところには「なお狂言方の名手として、幕末には清水町の森京作、曲尺手町の本多孫三郎、魚町の鳥居猪兵衛・鳥居新三郎・佐藤善七・鈴木彦八らが注意されていた」ともある。

早く久曾昇昇氏が「豊橋地方における近世以前の能楽」（『愛知大学総合郷土研究所紀要』第二十輯・昭和五十（一九七五）年三月十五日・愛知大学総合研究所）に嘉永三（一八五〇）年九月五日吉田城内神明社の正遷宮祝能で、大木又平が新城の富永神社に奉納した掲額に能組があるとして紹介されたものの中に《鞍猿》を鳥居猪兵衛が木村喜三郎・大木又丙平・加山喜蔵と共に演じている資料を紹介されている。これが鳥居姓の始めであろう。明治に入ってから、寛鉦一・飯塚恵理人編集『近代名古屋の能楽を支えた人々』（平成十三（二〇〇一）年七月・東海能楽研究会）で拾うことができる。

既に国立能楽堂で展示され、『魚町能楽会所蔵 能面と能装束』（平成元（一九八九）年十月二十八日）に特集が組まれてもいる。それには「現在魚町に所蔵されている面・装束のなかには、吉田藩から直接もたらされたものの他に、魚町在住の鳥居家が所蔵していた狂言面・狂言装束（昭和三（一九二八）年に神社の宝物庫ができた際に収蔵された）及び、豊橋の他の能楽愛好団体「松風会」から移管された装束類がある」とされる。平成十（一九九八）

年十月にも豊橋市美術博物館で「華麗なる能装束の美」として展覧会が開かれたようである。文書資料の本格的な調査が行われるようになったのは、やはり地元の東海能楽研究会よつての平成十七（二〇〇五）年六月に入つてからことであつた。いきさつについては、林和利氏「豊橋・安海熊野神社蔵能楽資料の調査」（『東海能楽研究会 催花賞受賞記念論文集』（平成十九（二〇〇七）年三月）に詳しい。それを受けた形で米田真理氏が「豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵狂言伝書の性格」（『名古屋芸能文化』第二十一号・平成二十三（二〇一一）年十二月十八日・名古屋芸能文化会）で報告されている。特に鳥居姓にかかわる記述として「二、狂言伝書から知られる所持者たち」の中に「新三郎・寅藏・音次・喜楽」の名を挙げる。「新三郎」の項目で、鳥居家は豊橋市魚町に住み、「加納屋」の屋号を持ち、砂糖・鯉節を扱っていたようである。新三郎が通名、江戸時代では太鼓の演者でもあつたようである。佐藤友彦氏紹介の『山脇門人帳』にその名が見えるという。

いずれにしても、この章では、中之島図書館の狂言台本は和泉流であつて、所持者「鳥居」は岡崎市魚町の鳥居、米田氏の考察にある鳥居喜楽は「明治34（一九〇一）年から大正6（一九一七）年まで、豊橋や新城での活動記録が見られる」ということなので、彼の可能性が高いであろうと考えてみたい。

四 野村又三郎家の位置づけ

米田真理氏は、江戸時代にあつては山脇和泉が指導にあたつていたが、明治以降になると早川幸八系が主流となつていくとされる。早川幸八系の台本には吉田幸一編『狂言集 和泉流』（昭和二十八（一九五三）年三月第一冊・古典文庫）がある。斑山文庫『狂言六義』で、笹野堅氏は「和泉流早川幸八系の伝書と思はる」と記していることから類推されたものである。しかし、たとえば『雷』一曲を取り上げても雷の名乗りが「俺」であり、『狂言世利不』の「某」とは相違する。この違いは大きいのではあるまいか。そのほかの可能性はないであろうか。野村又三郎家はどうであろうか。

和泉流の台本で最も困難を覚えるのが野村又三郎家の台本である。『能楽大事典』の「和泉流」の項目にも「野村又三郎家の台本はほとんど公刊されていない」とする。古川久・小林責編『校注古典叢書 謡曲・狂言集』が野村又三郎十一世信英（昭和二十（一九四五）年80歳没）のものを底本としており、それが唯一のものであるが、本稿の曲と重なる曲はない。

以前NHKテレビで十三世又三郎氏が稀曲《唐人子宝》を説明されるにあつて、同家に伝わる天明年間成立とされる小本『唐音之部』を示されていた。それには発音と対訳が記され、中国の古語だとも述べられていた。実は、私自身「唐素材の能・狂言」を

『東西學術研究所創立六十周年記念論文集』（二〇一一年・関西大学出版部）で報告し、拙著『続狂言史の基礎的研究』に再録した。その際「漢文をそのまま音読みにした」と結論づけてしまったが、これは訂正しなければなるまい。父君十二世又三郎氏には、お世話になり、御自宅で撮影も許されたのだが、一日だけのことであり、当時、台本までは撮影しなかったことが今にして悔やまれる。

野村又三郎家にこだわるのは、同家が十世又三郎信茂（明治四十（一九〇七）年72歳没）の時代、「明治初期に父祖伝来の地である京都を去って大阪に移った」（『狂言事典 事項編』・昭和五十一年（一九七六）年十二月・東京堂出版）からである。子の十一世又三郎信英（昭和20（一九四五）年81歳没）も父に従ったが、父没後「関西での勢力伸長が思うにまかせなかつたので大正六（一九一五）年に上京。しかしその後も祖父以来の地盤のある中京地区へ出稽古を続けるなど、東奔西走して勢力の発展をはかった」とある。大阪府立図書館が大正九年に台本を購入できたのは、そのあたりの事情があつたのではあるまいか。また、名古屋の狂言共同社の同人には河村鍵三郎（昭和十五（一九四〇）年78歳没）や山本久平は十世又三郎の弟子でもあつた。なんとなく狂言共同社は山脇和泉系で野村又三郎家とは異なっていたと思つていたが、想像以上に同じ和泉流内での交流はあつた。『狂言世利不』には又三郎家の影響も考慮に入れる必要があるのではあるまいか。

いささか強引なところもあるかも知れないが、次に橋本朝生氏

が『中世史劇としての狂言』を完成させるために、当時、関西大学を訪問され、図書館の本をコピーされていたありし日の姿を思い浮かべながら、かといつて、その後、誰も紹介された訳でもないで、今回の紙面を借りて次章で、せめて書誌事項を記しておきたく思つたからである。

五、関大本の野村又三郎家本

関西大学総合図書館には、野村又三郎信茂にかかわつての写本が二種ある。なお、①②は、旧鴻山文庫蔵で現在では同秩に保存され秩書名は「和泉流狂言諷拔書／和泉流狂言」となっている。『鴻山文庫蔵能楽資料解題』（法政大学能楽研究所編）には記載されてないものである。以下、翻刻にあたって行替は／で記し、異体字・誤字は通行の書体に訂正してある。

① 『和泉流狂言諷拔書』一冊。

20行青原稿箋。袋紙縫り綴。4穴。229×149mm。15丁・後2丁白。表紙「猥二他見不免／和泉流狂言諷拔書／野村社中／多田栄之祐／列有」。見返し「明治十六歲初一月吉辰／野村信茂寫」。朱角印「鴻山文庫」。請求記号「912・3／14／1／203133234」。明治一六歳＝一八八三年節記号あり。* 池田廣司『狂言歌謡研究集成』（風間書房）による題。

内題内容《三井寺之内 山田矢羽瀬（*舟ふな） 小舞之謡》《若菜ノ内 春毎 小舞謡》《花あらそひ》《松ゆすり葉 舞謡》《祝言

之語（*松弓弦葉）《名月（*ざむざ）小舞諷》《土車之諷》《宇治の晒》《仕舞 小謡 猩々》《熊野》《田村》《鶉飼》《羽衣》《放下僧》《芦刈》《鐵輪》《八嶋》

② 『和泉流狂言／野村又三郎先生口授』一冊。

20行赤原稿箋。袋紙縫り綴。4穴。229×155mm。28丁。朱振りカタカナ書き込みあり。朱角印「鴻山文庫」。表紙「乙號／明治拾六年三月修／野村又三郎先生口述／和泉流狂言／題號／成上り／口真似／宗八／竹生嶋／重喜／舟船／全／多田氏」。請求記号「912・3／15／1／203133242」。明治拾六年＝一八八三年

【考察】明治十六（一八八三）年の段階では、やはり、野村又三郎家十世信茂ということになる。

まとめと問題点

中之島図書館所蔵『狂言世利不』については

- 一、本来、数名で書写したものであろう。
- 一、第八冊《酢はじかみ》裏表紙に「鳥居氏所持」、《鞍馬参詣》に「卜里居」と記すので、もとは鳥居氏所蔵のものであったことがわかる。岡崎市魚町に住んでいた鳥居氏であったと思われる。
- 一、和泉流野村又三郎家の台本である可能性を考慮に入れるべきである。十一世の離阪時にかかわるものであろうか。
- 一、関大本の二種とのかかわりにおいては、明治初年と十六（一

八八三）年の違いはあるが、野村又三郎十世信茂の弟子多田栄之祐が書写したものである。

以上は平成二十七（二〇一五）年十二月二十四日、神戸女子大学古典芸能研究センターの六麓会で研究発表を行なったものに加えたものである。

Introduction of *Kyogen Serifu* Owned by the Osaka Prefectural Nakanoshima Library

SEKIYA Toshihiko

This paper is going to introduce *Kyogen Serifu* (狂言世利不) in the possession of the Osaka Prefectural Nakanoshima Library. The author gave a lecture titled *The Fun of Kyogen* at the library on March 26, 2015, at the request of Osamu Kaziwara, the Chief of the Division of Classics and Related Materials on Osaka. At that time, Mr. Kaziwara displayed manuscripts of *Kyogen Serifu* in eight volumes and asked about the details. Although it was obvious that no one had presented them to an academic society, an immediate answer could not be given. Therefore, the author went to read the manuscripts again and began investigation on another day, confirming that there is a strong possibility that they are new materials, scripts copied by disciples of the Matasaburo NOMURA family of Izumi school. That is, the members of the family settled in Kyoto over generations since the time of Matasaburo I, but they moved to Osaka in the period of Nobushige X (died in 1907 at the age of 72), where they remained until they moved again in the period of Nobuhide (died in 1945 at the age of 81). It was probably during this time of their leaving from Osaka when the manuscripts were relinquished, since the library purchased them in 1920. They originally belonged to Mr. Torii, who seems to had relation with Matasaburo. It is probable that Mr. Torii and several other disciples copied a script of each play separately. This paper is intended as introduction to Kyogen scripts, which have been long forgotten for some reason.

キーワード：大阪府立中之島図書館 (Osaka Prefectural Nakanoshima Library)、
狂言世利布 (Kyogen Serifu)、和泉流野村又三郎家 (Matasaburo
NOMURA family of Izumi school)